

城端線開通 120 年記念シンポジウム

「どう創る 地域の未来と公共交通」

2017 年 12 月 10 日(日)午後 1:30～
南砺市城端伝統芸能会館じょうはな座

◇主催者あいさつ

城端線開通 120 年記念事業実行委員長 松本 久介

◇歓迎あいさつ

南砺市長 田中 幹夫 氏

◇基調講演

「地域の未来は変えられる」

田中 輝美 氏 ローカルジャーナリスト

「南砺の未来と城端線の価値」

藻谷 浩介 氏 地域エコノミスト

◇連続講座「城端線は何を変えたのか」開催報告

城端線開通 120 年記念事業実行委員 江田 攻

◇パネルディスカッション

- ・コーディネーター 中川 大 氏 富山大学副学長
- ・パネリスト 藻谷 浩介 氏 地域エコノミスト
- 田中 輝美 氏 ローカルジャーナリスト
- 田中 幹夫 氏 南砺市長
- 島 正範 氏 RACDA 高岡会長

主催：城端線開通 120 年記念事業実行委員会（ふるさと城端線応援団、RACDA 高岡、城端線もりあげ隊、南砺の城端線を活かす会、砺波土蔵の会、戸出地区未来創造異脳種会議、呉西地区公共交通再生研究会ほか）

共催：北日本新聞社

後援・協力：城端・氷見線活性化推進協議会、富山大学都市交通政策支援ユニット、砺波散村地域研究所、富山近代史研究会、となみ野田園空間博物館協議会、城端線活性化市民団体連携隊、JR 西日本ほか

プロフィール（順不同）

藻谷 浩介 氏（もたに・こうすけ）

1964年、山口県生まれ。1988年、日本開発銀行(現日本政策投資銀行)入行。勤務の傍ら日本3,200市町村、海外86か国を訪問し各地の地域経済や町づくりを視察、地域振興や人口問題に関し研究・著作・講演を行う。2012年より日本総合研究所主席研究員。著書に『中心市街地活性化のポイント』（ぎょうせい）、『海外の中心市街地活性化』（JETRO）、『デフレの正体』、『里山資本主義』（角川 One テーマ 21）、『実測！ニッポンの地域力』（日本経済新聞出版社）、『しなやかな日本列島のつくりかた』（新潮社）など。

田中 輝美 氏（たなか・てるみ）

1976年、島根県生まれ。1999年、山陰中央新報社入社。2011年、「日本ジャーナリスト教育センター」（JCEJ）設立、運営委員に。2013年、琉球新報社との合同企画「環（めぐ）りの海—竹島と尖閣」で日本新聞協会賞。2014年に独立。著書に『ローカル鉄道という希望-新しい地域再生、はじまる』（河出書房新社）。共著に『地域ではたらく「風の人」という新しい選択』（ハーベスト出版）、『未来を変えた島の学校 隠岐島前発ふるさと再興への挑戦』（岩波書店）、『関係人口をつくる—定住でも交流でもないローカルイノベーション』（木楽舎）など。

中川 大 氏（なかがわ・だい）

1956年、京都市生まれ。小学校から高校まで富山県朝日町で暮らす。都市交通政策のスペシャリストで、富山ライトレールなど各地の公共交通再生に関わってきた。京都大学教授を経て2017年から京都大学名誉教授、富山大学副学長。2018年4月開設の都市デザイン学部担当。

田中 幹夫 氏（たなか・みきお）

1961年、南砺市（旧利賀村）生まれ。会社員、村役場職員、市議1期を経て、2008年から南砺市長。過疎地に生まれ、地域の素材を活かしたまちづくりを実践してきた体験を生かし、「世界に誇れる一流の田舎」を目指す。

島 正範 氏（しま・まさのり）

1959年、高岡市生まれ。路面電車を活用した岡山市の市街地活性化運動と出会い、1998年にRACDA高岡を結成。存廃に揺れた万葉線の第三セクター化を草の根運動で支えた。

城端線開通 120 年記念連続講座

「城端線は何を変えたのか」開催一覧

1. 「城端線は秘密がいっぱい!!」(7月9日、散居村ミュージアム)
講師：木本尚志氏(富山県呉西地区公共交通再生研究会 会員)
城端線の歴史には、さまざまなロマンが込められています。“知られざる秘密”を存分に紹介しました。
2. 「明治人は鉄路に憧れた」(7月23日、散居村ミュージアム)
講師：草卓人氏(鉄道史研究家) 廣瀬直樹氏(氷見市立博物館主任学芸員)
明治時代、水運から鉄道への物流の大転換がどのように起きたか、なぜ砺波地方に県内初の鉄道ができたか、などについて考えました。
3. 「となみ野の産業革命」(8月12日、散居村ミュージアム)
講師：竹島慎二氏(富山近代史研究会 会長)
となみ野を大きく変えた城端線の開通を、世界史、日本史的な視点から考え、その意義を探りました。
4. 「人が動いた、地域が変わった」(9月16日、福野文化創造センターヘリオス)
講師：西野真夫氏(砺波散村地域研究所所員)、中川正人氏(城端・氷見線活性化推進協議会事務局、高岡市総合交通課地域交通係長)
鉄道の機能が、物流から人の「高速中距離輸送」「近距離大量輸送」に変わってきた現在、地方交通機関にどのような役割が求められるのか。城端線沿線の人口動態や将来予想を踏まえて、考えました。
5. バスハイク「城端線をもっと知ろう」(10月15日、城端線・加越線沿線一円)
第1～4回の講座で学んだ城端線、旧加越線の歴史と現在を、実際に見て回りました。新たな発見がたくさんありました。
6. シンポジウム「どこへ行く となみ野」(11月12日、散居村ミュージアム)
基調講演:吉田千秋氏(ひたちなか海浜鉄道社長)
元万葉線職員で、ひたちなか海浜鉄道の公募社長に迎えられた吉田氏が、地域とともに歩む鉄道経営について講演。
シンポでは、連続講座の講師が講座を振り返り、城端線によってとなみ野はどう変わったか、人口減少が進む未来のとなみ野の姿をどのように描いていくか、などについて熱い議論を交わしました。

※各講座の録画、録音、資料などは、「となみ野 JP」(<http://tonamino.jp/shiru/120.html>) にアップしてあります。

M E M O